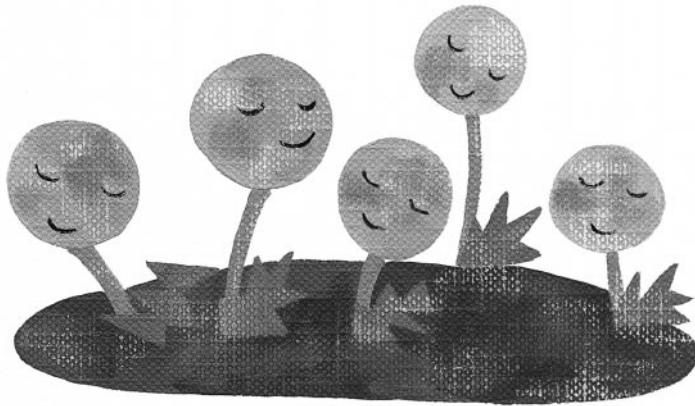


第 3 章

子どもの学力・  
習い事・進路



## 1

# 学力観・勉強観

## 1. 母親の学力観・勉強観

母親の学力に対する考え方と勉強に対する考え方を複数回答の形式でたずねた。

■ ふつうの学力では物足りない？（図3-1）  
母親に学力観・勉強観についてたずねた結果が図3-1である。最初に、学力観をみると、「ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」と答えた母親は58.1%と6割を切っている。おそらく残りの4割の母親の大半が子どもに“ふつう以上の生活ができるだけの学力”を身につけさせたいと思っている。そして、こうした母親の思いは、同じ図の「どこかの大学・短大に入れる学力があればいい」30.7%、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」18.0%という学力期待につながっている。なお、子どもの性別では、女子のほうが男子よりも「どこかの大学・短大に入れる学力があればいい」（男子27.3%、女子34.5%）が多く、反対に男子のほうが女子よりも「できるだけいい大学

に入れるよう、成績を上げてほしい」（男子23.9%、女子11.8%）が多くなっている。

■ 4分の1の母親が「今は勉強することが一番大切」と思っている（図3-2）  
勉強観については、第1位が「学校生活が楽しければ成績にこだわらない」35.8%、第2位が「今は勉強することが一番大切だ」25.3%であった。わが国ではもうかなり前から「教育ママが、目をつり上げて子どもに勉強をさせる」という風刺的描写がなされてきた。風刺ほどではないかもしれないが、調査結果ではちょうど4分の1の母親が「勉強が一番大切」と答えている。なお、第3位が「そんなに勉強しなくてもなんとか進学できるだろう」7.3%の順になっている。また、性別では「学校生活が楽しければ成績にこだわらない」（男子32.9%、女子38.9%）で女子のほうが多くなっている。

## 2. 母親の学力観・勉強観の子どもの学年別変化

母親の学力観と勉強観が、子どもの学年とともにどのように変化するかを調べてみた。

■ 早い段階から一定の割合で“ふつう以上の生活ができるだけの学力”を期待（図3-2）

図3-2は、子どもの学年別に母親の学力観と勉強観をみたものである。「ふつうの生活に困らないくらいの学力があればいい」は上述のように全体でみて6割を切っていたが、この傾向は小3生段階で始まっており、

ほぼ一定している。調査結果は、子どもが小さい段階から“ふつう以上の生活ができるだけの学力”を期待する日本の4割の母親像を浮かび上がらせている。なお、中1生の母親では“ふつう以上の生活ができるだけの学力”を期待する割合が一時的に増加する。子どもの中学入学に際して、学習面での期待が高まったためと思われる。しかしそうした傾向は、中2生母親・中3生母親ではもともともっている。

図3-1 母親の学力観・勉強観

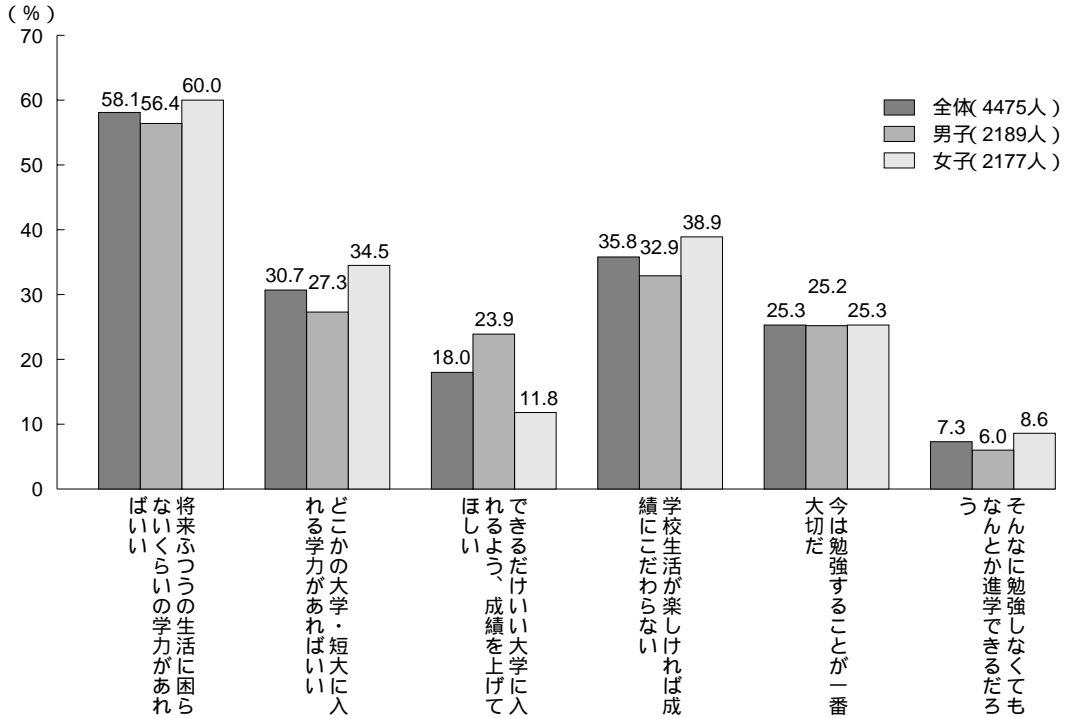
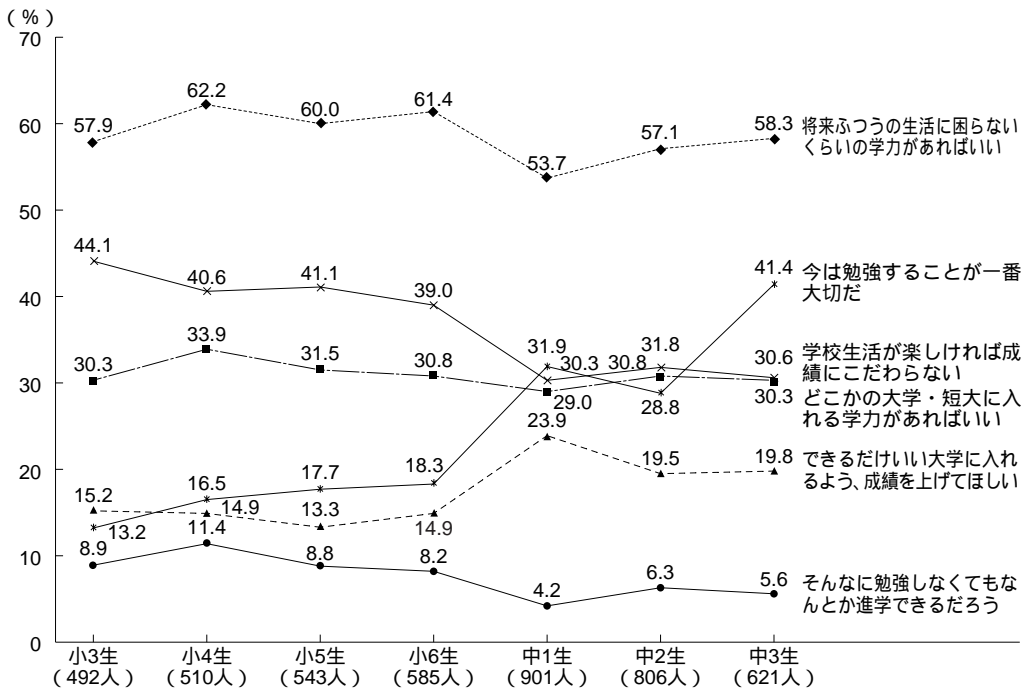


図3-2 母親の学力観・勉強観×学年



■ 中3生で「今は勉強することが一番大切」が4割強になる(図3-2)

「今は勉強することが一番大切だ」は、小3生母親の13.2%から小6生母親の18.3%まで徐々に上昇し、中学に入って中1生母親が31.9%、中2生母親が28.8%と3割前後にな

り、中3生母親ではさらに増加して41.4%と4割強の高い割合になっている。予想通り、高校受験が近づくとつれて、「今は勉強することが一番大切だ」と思う母親の割合が増加している。

### 3. 子どもの性別にみた母親の学力観・勉強観

■ 学力観で母親のレジスタンス(図3-3)

ジェンダー論という議論がある。女性が社会的に不利益な扱いを受けたり、不自由に生きるように方向づけられていることについての議論である。このジェンダー論の中にレジスタンス理論という理論がある。ジェンダー研究が明らかにしたところでは、女性に不利益や不自由がないように制度を作り変えても、女性のほうで不利益に生きる道を選んでしまう傾向がある。そして、なぜ女性が不利益や不自由に生きようとするかを説明する理論をレジスタンス理論という。

図3-3は、子どもの性別×学年別に母親の学力観をみたものである。自分自身が女である母親が、娘たちに対して息子たちとは異なる学力を期待していることがわかる。図をみると、女子の母親は男子の母親よりも「どこかの大学・短大に入れる学力があればいい」の割合が各学年で10ポイント前後高くなっている。また、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げてほしい」では、反対に男子の母親が女子の母親よりも10ポイントから15ポイントほど高くなっている。母親は、

教育機会の性別不平等の平等化にレジスタンスしており、息子はいい大学に、娘はどこかの大学・短大に入れればいいと考えている。ただし、「どこかの大学・短大に入れる学力があればいい」は、小6生と中3生といった進学を控えた時期にはレジスタンスが減り、子どもの性別の差が小さくなっている。

■ 女子には楽しい学校生活(図3-4)

また、図3-4は、子どもの性別×学年別に母親の勉強観をみたものであるが、ここでも母親はレジスタンスしている。「学校生活が楽しければ成績にこだわらない」で、男子の母親と女子の母親で回答に差があり、女子の母親のほうが高い割合になっている。とくに、小4生・小5生・小6生および、中2生で10ポイント前後の差になっている。さらに、中学受験を控えた小6生の母親では、「今は勉強することが一番大切だ」で子どもの性別による差がやや拡大している。また、「そんなに勉強しなくてもなんとか進学できるだろう」では、大きな差とはなっていないが、女子の母親のほうが高い値になっている。

図3-3 母親の学力観×性×学年

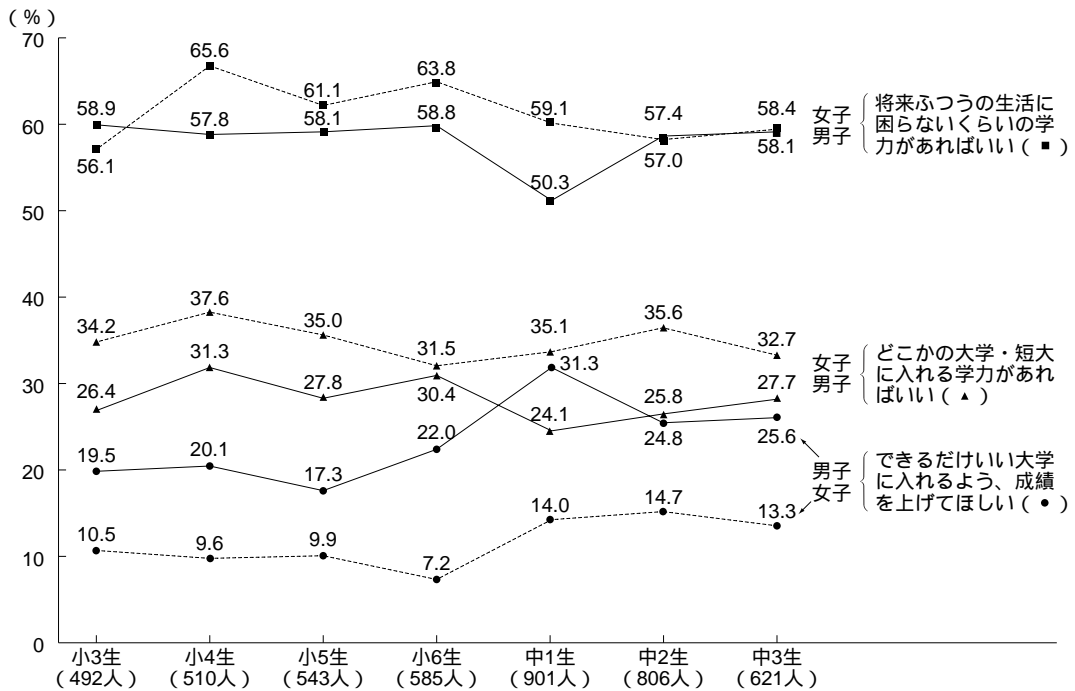
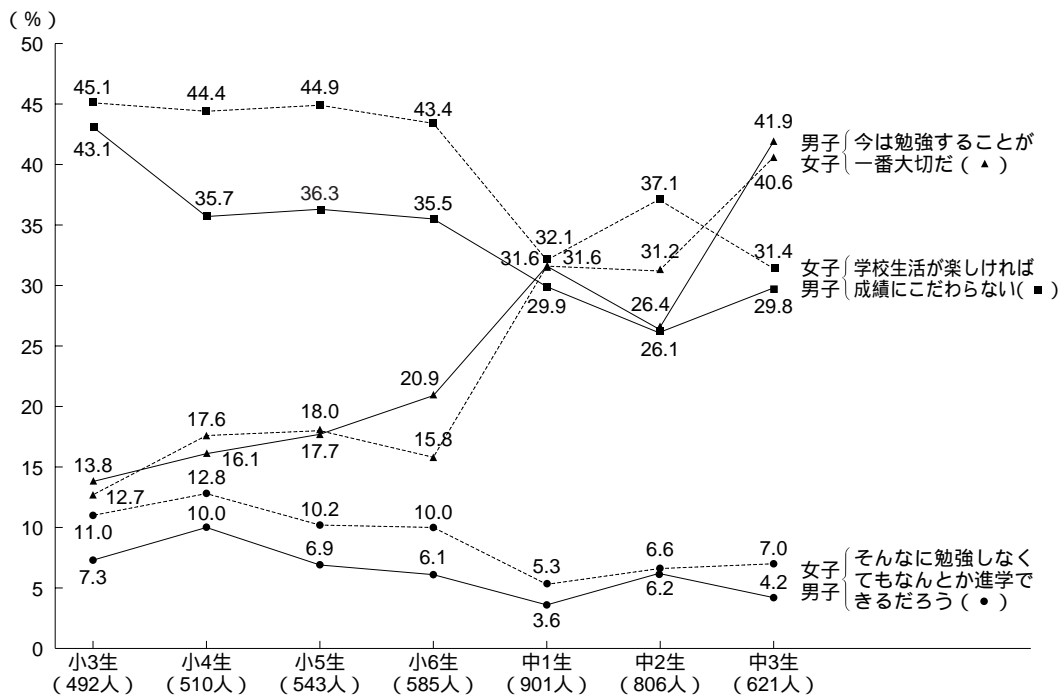


図3-4 母親の勉強観×性×学年



## 塾と習い事

### 1. 塾と習い事の経験率

子どもたちは、小・中学校時代を通じて、どのような塾や習い事を経験しているのだろうか。最初に、これまでに子どもたちに塾や習い事をさせた経験の有無をたずねてみた。

塾や習い事の経験率は小3生で飽和点に達する（図3-5）

図3-5は、子どもの学年別に、これまでに一度でも塾や習い事をさせたことがある割合をたずねた結果である。年少児の段階ですでに44.6%が塾や習い事をさせたことがあると答えている。その後、学年が上がるごとに、10ポイント以上の割合で増加し、小1生の母親で84.8%と8割を超える。そして、小3生の母親で93.1%と9割を超えて、塾や習い事経験率の飽和点を迎える。すなわち、塾や習い事をさせる母親は、子どもが小3生までに“塾や習い事のデビュー”をすませている。その後は新たに子どもに塾や習い事をさせる母親はほとんどおらず、おおよそ95%前後で中3生まで推移する。

経験率第1位はスイミングスクール（図3-6）

どのような塾や習い事を経験させてきたのか、複数回答でたずねた結果が、図3-6である。なお、これ以降しばらく、塾と習い事の経験率では、調査対象全員を母数としてパ

ーセントを計算している。巻末の基礎集計表は、塾や習い事をさせたことがない母親は計算から除外してあり、本文の%とは、異なる値になっている。

さて、図で最も経験率が高いのが「スイミングスクール」60.1%で、6割の母親が子どもに経験させている。続いて第2位は「通信教育」47.8%で5割弱、第3位は「楽器（ピアノやバイオリンなどの個人レッスン）」36.3%で3分の1強であった。なお、第3位の「楽器」に「音楽教室（ヤマハやカワイ音楽教室など）」18.3%を加えると、54.6%と5割を超える。かつては、習字とそろばんが塾や習い事の定番であったが、今は、スイミングスクール、通信教育、楽器が塾や習い事の定番になっている。その他では、「習字」30.9%、「受験のための塾（進学塾）」26.1%、「スポーツクラブ・体操教室」23.4%、「英会話などの語学教室や個人レッスン」23.0%、「地域のスポーツチーム（野球やサッカーなど）」21.5%、「計算・書きとりなどのプリント教材教室（公文など）」20.2%などの経験率が20%を超えている。子どもたちが経験してきた塾や習い事は非常に多様である。また、図の塾や習い事のパーセントを合計するとわかるように、一人あたりの経験数も複数になっている。

図3 - 5 塾や習い事経験率×学年

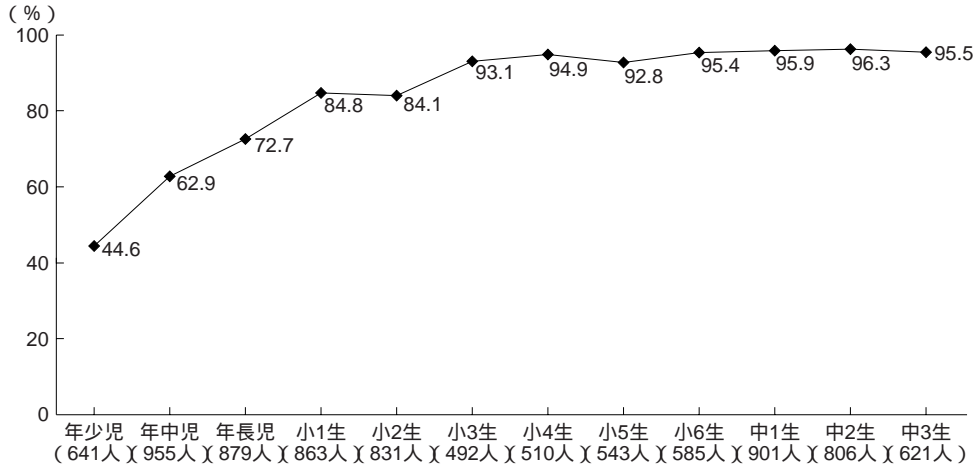
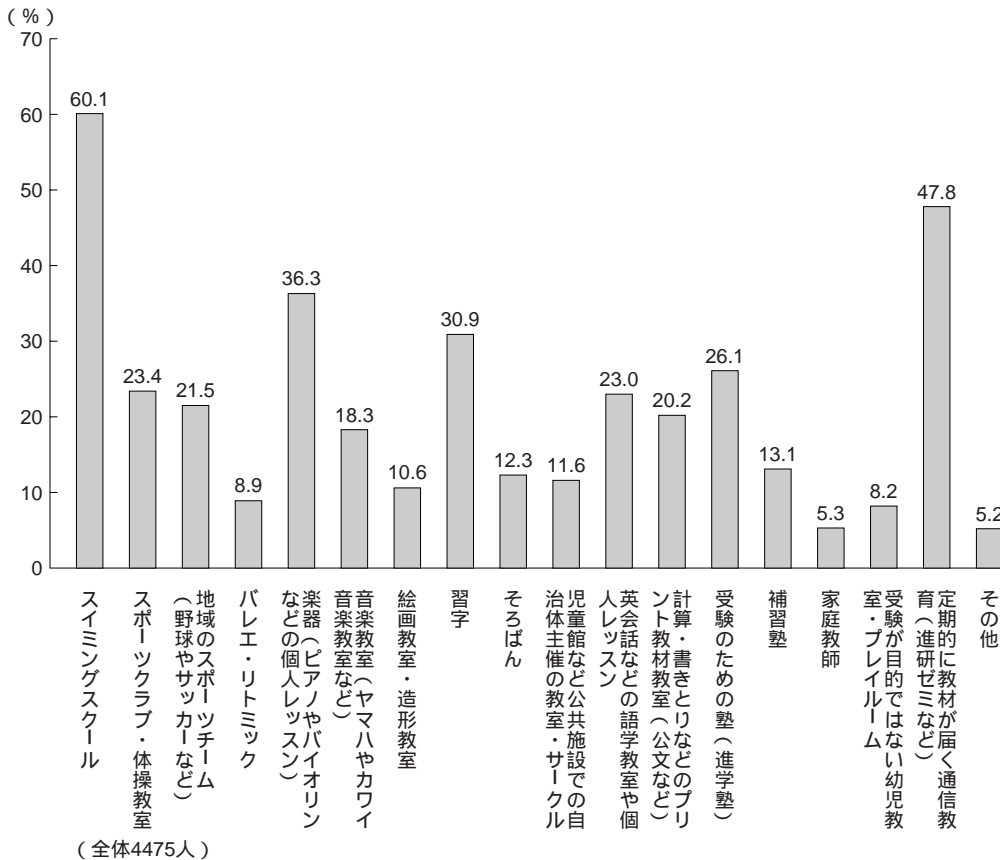


図3 - 6 塾や習い事の内容別にみた経験率



## 2. 現在通っている塾や習い事

次に、今現在通っている塾や習い事について複数回答でたずねた結果をみてみよう。

現在、塾や習い事に通っている割合は77.0%、小4生では85.7%に達する(表3-1)

表3-1は、今現在、塾や習い事に通っている割合をみたものであるが、どこにも通わせていない母親は23.0%であり、残りの77.0%が塾や習い事に通わせている。子どもの性別では女子の母親のほうが塾や習い事に通わせている割合がやや高い(男子74.5%、女子79.8%)。

通っている塾や習い事の数は一つが33.5%、二つが24.8%、三つが12.8%、四つ以上が5.8%であり、複数(二つ以上)の塾や習い事に通っている割合は43.4%に達している。そして、ここでも女子の母親のほうが高い割合になっている(男子37.7%、女子49.4%)。学年別には、小4生の母親が85.7%と最も塾や習い事に通わせており、複数通わせている割合も64.1%に達している。

今しているのは①通信教育②楽器③進学塾が上位3位(図3-7)

図3-7は、今現在どのような塾や習い事

をしているかを複数回答でたずねた結果である。今現在、させている割合が最も高いのは、第1位が「定期的に教材が届く通信教育(進研ゼミなど)」21.6%で、続いて第2位が「楽器(ピアノやバイオリンなどの個人レッスン)」18.6%、第3位が「受験のための塾(進学塾)」18.4%であった。その他で10%を超えていたのは、「補習塾」13.3%、「習字」11.7%、「英会話などの語学教室や個人レッスン」11.7%、「スイミングスクール」10.2%であった。前述の、これまでに通ったことのある塾や習い事の場合にもそうであったが、今現在通っている塾や習い事も非常に多様である。また、「スイミングスクール」は体験率が高い割には今現在通っている割合が少ない。これは、後述するように「スイミングスクール」は、小3生以降では、急激に減少していくからである。

子どもの性別には、男子は女子よりも「地域のスポーツチーム(野球やサッカーなど)」(男子15.5%、女子2.8%)が多く、反対に女子は男子よりも「楽器(ピアノやバイオリンなどの個人レッスン)」(男子8.5%、女子28.7%)が多い。

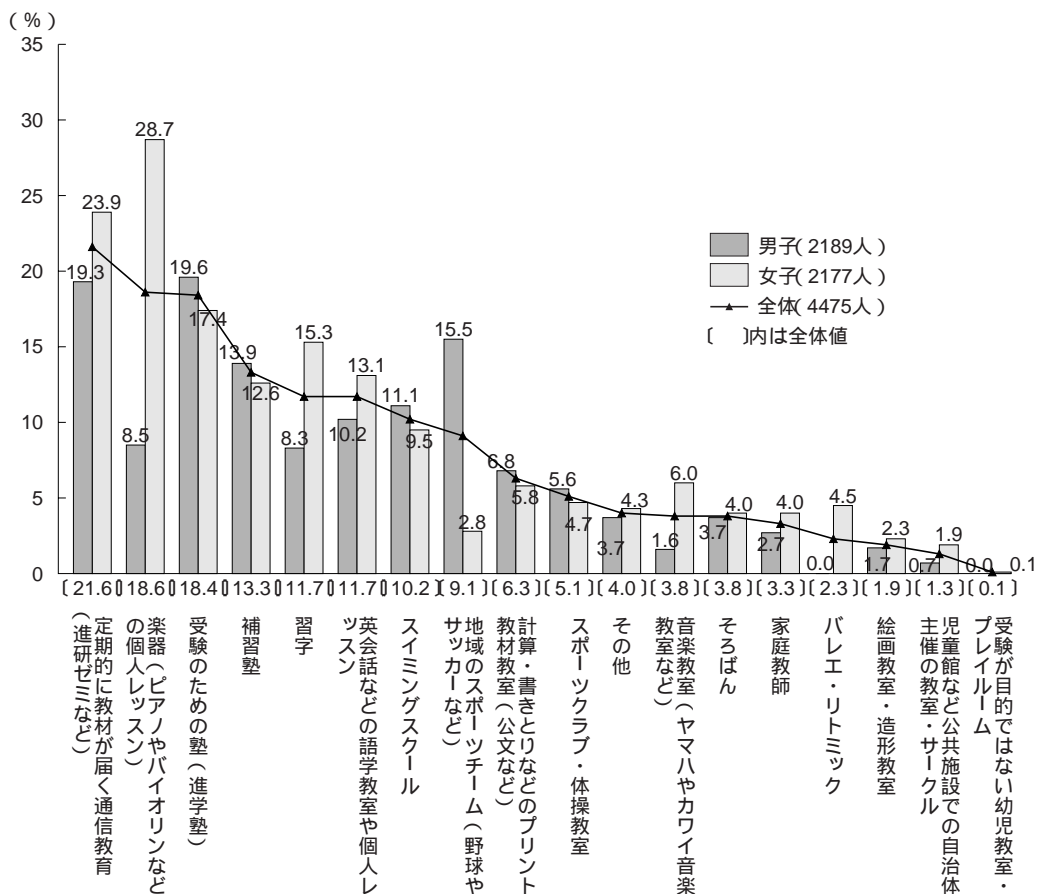


表3-1 現在通っている塾や習い事の数×性・学年

(%)

	全体 (4475人)	性別		学年別						
		男子	女子	小3生	小4生	小5生	小6生	中1生	中2生	中3生
		(2189人)	(2177人)	(492人)	(510人)	(543人)	(585人)	(901人)	(806人)	(621人)
通っていない	23.0	25.5	20.2	19.1	14.3	18.8	17.3	34.9	22.3	25.9
一つ	33.5	36.8	30.4	20.3	21.6	27.6	34.7	36.6	42.9	40.9
二つ	24.8	22.7	27.4	26.2	30.0	27.3	26.8	19.2	23.4	25.9
三つ	12.8	10.7	14.7	21.3	21.0	17.7	14.7	7.3	9.1	5.8
四つ以上	5.8	4.3	7.3	13.0	13.1	8.7	6.5	2.0	2.2	1.4

図3-7 現在通っている塾や習い事の内容



■ スポーツ・芸術系は小学校まで、唯一の例外はピアノ・バイオリン（図3 - 8(1)）

今現在、通っている塾や習い事の種類をたずねた結果を学年別にみたのが、図3 - 8(1)～(3)である。最初に、(1)でスポーツ芸術系の習い事をみると、「スイミングスクール」が小3生で34.3%と高い割合となっているが、学年が上がるにつれて急激に減少し、小5生では14.0%、小6生で6.2%、中1生で2.4%、中3生では0.3%まで下がる。他の習い事もおおよそ同じ傾向で、スポーツ・芸術系は小学校では学年が上がるにつれて減少し、中学校でほとんど通わなくなっている。唯一例外なのは「楽器（ピアノやバイオリンなどの個人レッスン）」で、小4生の27.3%を最高に、その後は習う割合が下がっていくが、中学生になっても中1生で16.5%、中2生で17.6%、中3生でも12.1%がピアノやバイオリンの個人レッスンを受けている。

■ 中学生も通う英会話（図3 - 8(2)）

かつて、代表的な習い事の一つであった「習字」は、今でも小学校段階では2割弱の母親が習いに行かせている（図3 - 8(2)）。そして、中学に入っても、中1生で6.5%、中2生で6.6%、中3生で3.1%が通っている。これに対して、「そろばん」は小3生の10.0%が最も高く、小6生の5.1%まで徐々に下げ、中学校段階では1%を切っている。「英会話などの語学教室や個人レッスン」は、小3生の11.2%から徐々に通塾率を高めて小6生で

17.4%とピークを迎え、その後の下がり方はゆるく、中3生でも8.2%が通っている。

■ 中2生の4割が進学塾に通っている

（図3 - 8(3)）

学習系の塾では、「定期的に教材が届く通信教育（進研ゼミなど）」が小4生以降ほぼ2割の利用率をキープしている（図3 - 8(3)）。これに対して、学年とともに高まるのが、「受験のための塾（進学塾）」で小3生の段階では2.8%であったのが徐々に増加し、中学受験の終わった中1生でやや下がったあとに再び増加へと転じ、中2生で27.2%、中3生で40.4%と4割を超えるまでになっている。「補習塾」は、小3生の4.5%から少しずつ増加していくが、中2生の20.7%をピークに、高校受験を控えた中3生では14.7%と下がってしまう。母親たちは、高校受験に際しては、補習塾で学校の授業に追いつくことではなく、進学塾で受験対策の授業を行わせている。「計算・書きとりなどのプリント教材・教室（公文など）」は、小4生で15.1%とピークを迎え、その後は小6生の8.2%まで徐々に減少し、中学では大きく下がっている。「家庭教師」は、学習方法としては最も個別対応的であり、経済的には最も負担がかかる方法でもあるが、小3生で1.0%が家庭教師を雇い、その後少しずつ増加し、中3生では5.5%、すなわち20人に1人が家庭教師を雇っている。

### 3. させてよかった塾や習い事

調査では、これまで経験させた塾や習い事の中で、どの塾や習い事が最もよかったと思うかをたずねている。ところで、全サンプル数を母数として「最もさせてよかった」と回答した母親の数を計算したのでは、多数の子どもが経験している塾や習い事が、サンプル数が多いために「最もよかった」の値が高くなってしまふ。そこで、本報告書では、その

塾や習い事を体験させた母親のうち、何パーセントの母親が「最もよかった」と答えているかを計算している。たとえば、「補習塾」が最もよかったと答えた母親は83人いたが、ここでは、83を全サンプル数の4,475で割るのではなく、子どもを補習塾に通わせたことがある584人で割って、それに100をかけてパーセントを計算している。

図3-8 (1)現在通っている塾や習い事×学年(スポーツ・芸術系)

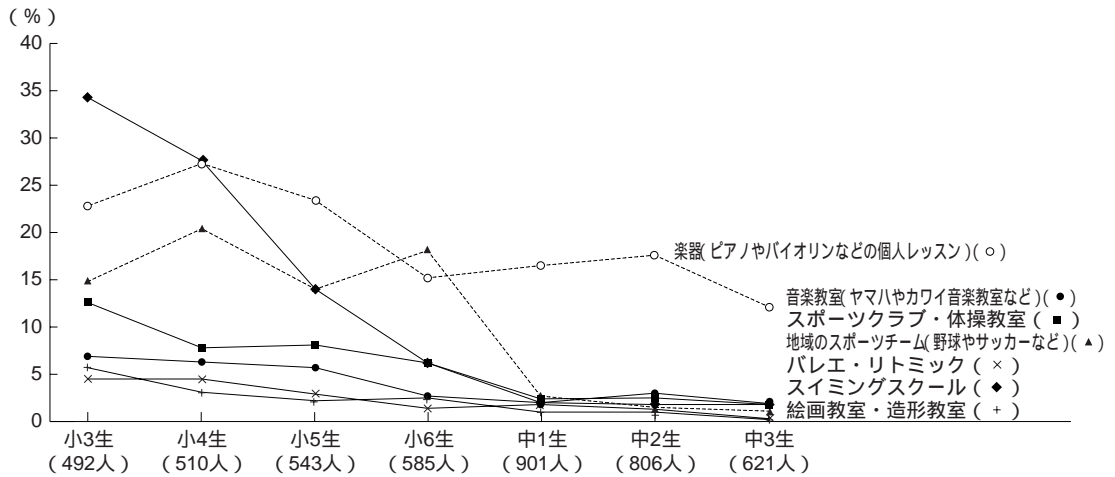


図3-8 (2)現在通っている塾や習い事×学年(習字・そろばん・語学系)

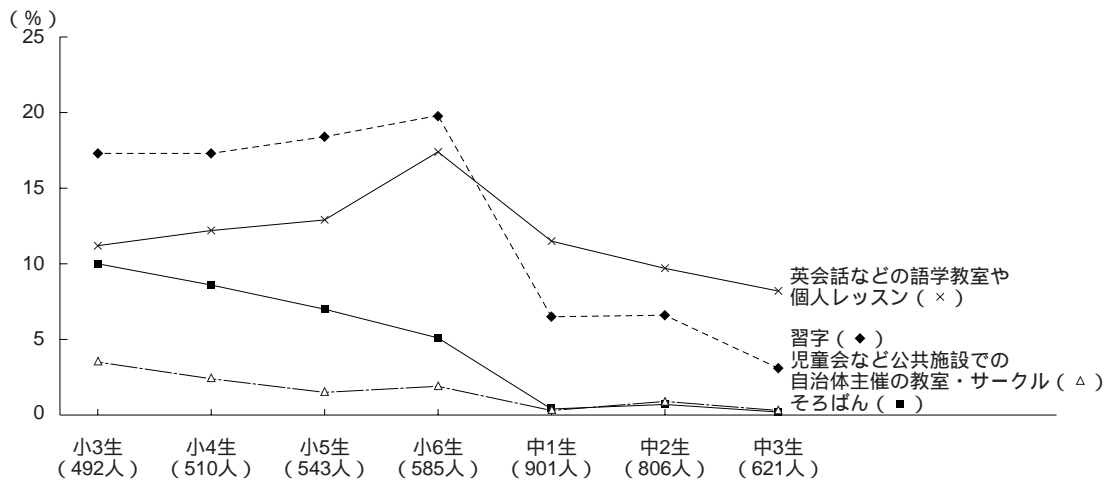
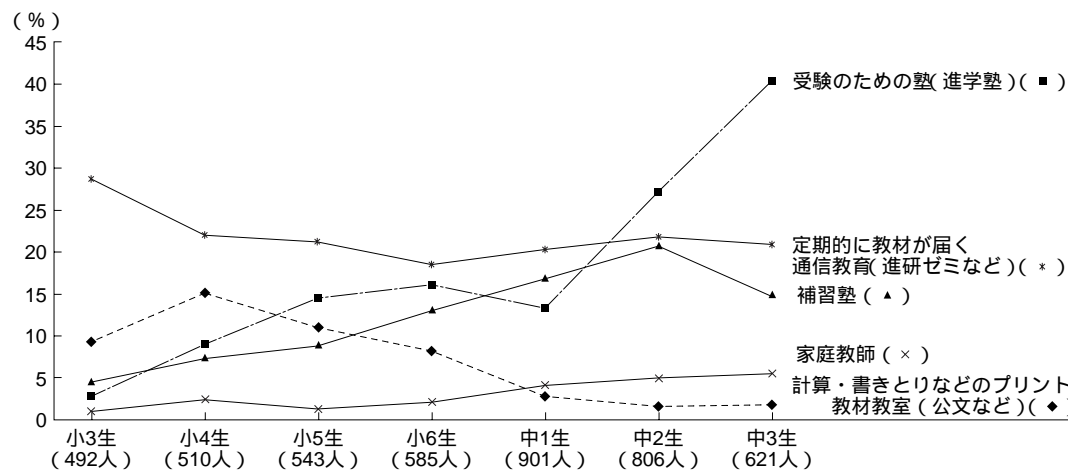


図3-8 (3)現在通っている塾や習い事×学年(学習塾系)



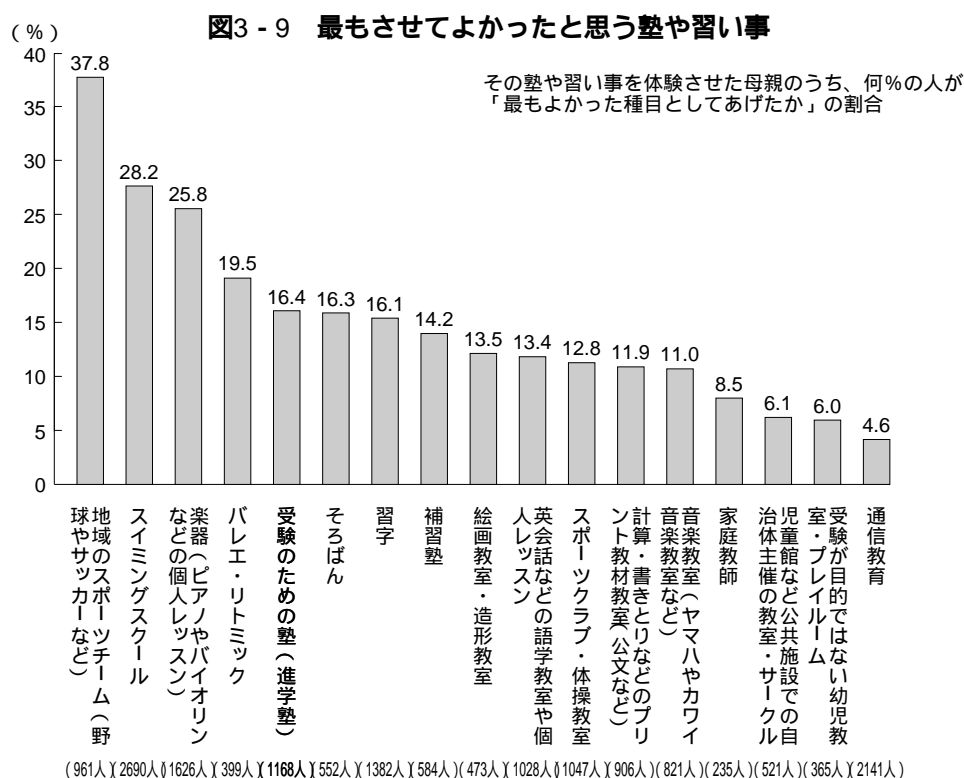
■ スポーツ系と芸術系で高い評価(図3-9)  
 上述の計算式で「最もさせてよかった」と思う塾や習い事をたずねた結果が図3-9である。最もさせてよかったと評価されている塾や習い事の第1位は、「地域のスポーツチーム(野球やサッカーなど)」37.8%、第2位「スイミングスクール」28.2%、第3位「楽器(ピアノやバイオリンなどの個人レッスン)」25.8%、第4位「バレエ・リトミック」19.5%と、スポーツ系と芸術系が上位に並んでいる。第6位「そろばん」16.3%と第7位「習字」16.1%には、かつての代表的な習い事が続いている。

### 塾や習い事を評価したときの理由 (表3-2)

どの塾や習い事が最もよかったかを評価したときの理由をたずねてみた(表3-2)。最も多かった理由から順に並べると、第1位「今までできなかったことができるようになった」38.4%、第2位「習っていることが得

意になった・上手になった」34.2%と達成感にかかわる二つの理由が3割を超えていた。第3位以下は「自信がついた、積極的になった」28.4%、「身体が丈夫になった」25.5%、「友だちが増えた」25.1%、「集中力・精神力などがついた」24.6%と続いている。これに対して、学校での成功への関与を示す「学校生活で役に立った(成績が上がる・授業がよくわかる・体育の授業が得意になるなど)」23.2%や、芸術による内面的世界への影響を示す「情操面にいい影響があった」21.7%の二つは意外に順位が低く、第7位・第8位であった。

同じ表で反対に、最も評価の理由にされなかったのは、「志望校に合格した」2.8%、「礼儀正しくなった」8.0%、「友だちに自慢できるものができた」11.7%、「学校の行事で活躍する場ができた(運動会・合唱コンクールなど)」11.9%、「学習習慣が身についた」12.5%などであった。



子どもの性別に母親の評価の理由が異なっている（図3 - 10）

最後に、子どもの性別に塾や習い事を評価した理由をたずねた結果をみてみよう（図3 - 10）。

男子の母親のほうが多かったのはおおむねスポーツに関係している理由で、「身体が丈夫になった」（男子33.5%、女子17.8%）、「友だちが増えた」（男子29.5%、女子20.7%）、「礼儀正しくなった」（男子10.7%、女子5.6%）

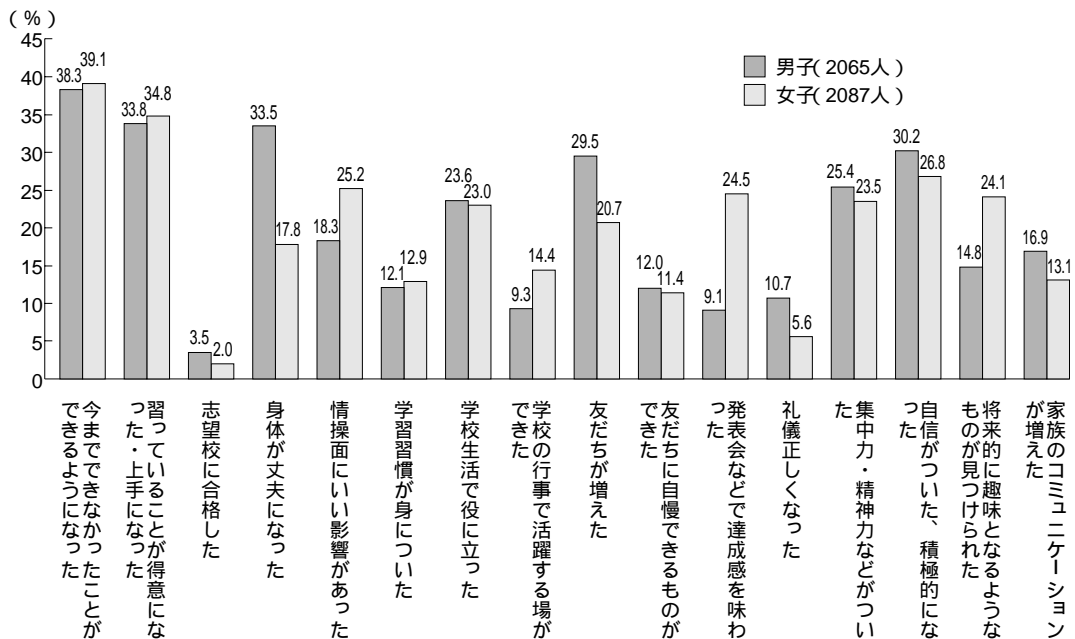
の三つであった。これに対して、女子の母親のほうが多かったのは、芸術と関連のある項目で、「情操面にいい影響があった」（男子18.3%、女子25.2%）、「学校の行事で活躍する場ができた（運動会・合唱コンクールなど）」（男子9.3%、女子14.4%）、「発表会などで達成感を味わった」（男子9.1%、女子24.5%）、「将来的に趣味となるものが見つけられた」（男子14.8%、女子24.1%）であった。

表3 - 2 最もさせてよかったと思う理由

		(%)	
今までできなかったことができるようになった	38.4	将来的に趣味となるようなものが見つけられた	19.4
習っていることが得意になった・上手になった	34.2	発表会などで達成感を味わった	16.9
自信がついた、積極的になった	28.4	家族のコミュニケーションが増えた	14.9
身体が丈夫になった	25.5	学習習慣が身についた	12.5
友だちが増えた	25.1	学校の行事で活躍する場ができた（運動会・合唱コンクールなど）	11.9
集中力・精神力などがついた	24.6	友だちに自慢できるものができた	11.7
学校生活で役に立った（成績が上がる・授業がよくわかる・体育の授業が得意になるなど）	23.2	礼儀正しくなった	8.0
情操面にいい影響があった	21.7	志望校に合格した	2.8

（母数は子どもに塾や習い事を経験させたことがある母親4252人）

図3 - 10 最もさせてよかったと思う理由×性



（母数は子どもに塾や習い事を経験させたことがある母親4252人）

## 進学期待と教育費

### 1. 子どもへの進学期待

調査では、母親が子どもにどの段階の学校まで進学してほしいと思っているかたずねた。

■ 子どもが小2生以下の時期に進学期待が形成されている（図3 - 11）

図3 - 11で、母親の進学期待をみると、小3生以上では、「中学校まで」0.0%、「高校まで」10.5%、「専門学校・各種学校まで」11.0%、「短期大学まで」7.0%、「四年制大学まで」53.3%、「大学院まで」3.6%となっている。ほぼ同じような傾向が小2生以下でもみられており、母親の進学期待は早い段階から決まっているようだ。

■ 男子の母親が高学歴を期待（図3 - 12）

図3 - 12で子どもの性別に母親の教育期待をみると、小3生以上では、男子では「四年制大学まで」62.5%、「大学院まで」5.5%、これらを合計して68.0%の母親が息子に四大卒以上の学歴をつけさせたいとしている。これに対して、女子では「四年制大学まで」43.9%、「大学院まで」1.8%と、合計45.7%が娘に四大卒以上の学歴を身につけさせたいとしている。これもレジスタンス理論となるが、自分自身が女性であるのに、男子の母親のほうが女子の母親よりも子どもに高学歴の取得を希望している。

図3 - 11 子どもに希望する最終学歴

	（％）						
	中学校まで 高校まで	専門学校・ 各種学校まで	短期大学まで	四年制大学まで	大学院 まで	無答不明 その他	
小2生以下 (4613人)	10.4	9.5	8.2	57.0	3.0	6.6	4.9
小3生以上 (4475人)	10.5	11.0	7.0	53.3	3.6	8.5	6.1

図3 - 12 子どもに希望する最終学歴×性

	（％）								
	中学校まで 高校まで	専門学校・ 各種学校まで	短期大学まで	四年制大学まで	大学院 まで	無答不明 その他			
小2生以下 (4613人)	男子 (2355人)		8.5	7.1	0.2	69.3	4.4	6.0	4.1
	女子 (2247人)		12.2	12.0	16.6	44.1	1.6	7.2	5.7
小3生以上 (4475人)	男子 (2189人)		9.8	8.5	0.4	62.5	5.5	8.0	5.3
	女子 (2177人)		11.2	13.2	13.8	43.9	1.8	9.1	6.9

## 2. 1か月の教育費

アンケートを持ち帰った子どもの、学校教育費を除いた、習い事、通信教育、塾、レッスンなどの費用の合計をたずねた。

■ 中3生では62.1%が1か月に2万円以上の教育費（図3 - 13、14）

図3 - 13で、小2生以下と小3生以上を比較すると、小3生以上のほうが1か月の教育費が多くなっている。「2万円～4万円未満」（小3生以上28.0%、小2生以下9.9%）、「4万円以上」（小3生以上9.5%、小2生以下1.4%）などのカテゴリーで、小3生以上の

ほうが多くなっている。

また、月に2万円以上の教育費をかけている母親の割合を子どもの学年別にみると、図3 - 14のように、年少児で5.5%だったのが、徐々に増えて小3生で18.8%になり、その後急増して小4生で26.0%、小5生で33.3%となる。その後は小6生の28.6%、中1生で31.5%と推移し、進学塾への通塾が増える（図3 - 8(3)）中2生で52.4%、中3生では62.1%に達する。日本では、中3生の6割以上で、一人1か月に2万円以上の教育費がかかっている。

図3 - 13 1か月の教育費×性

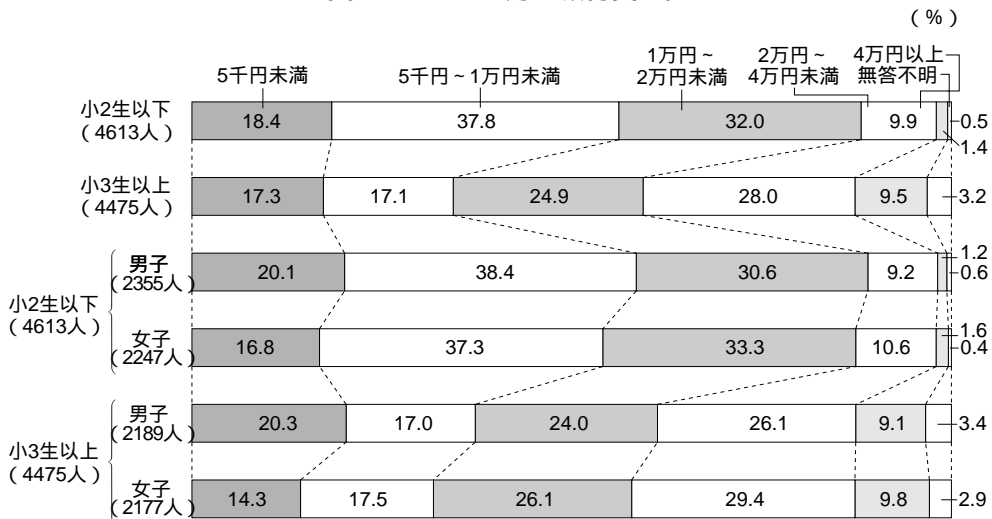
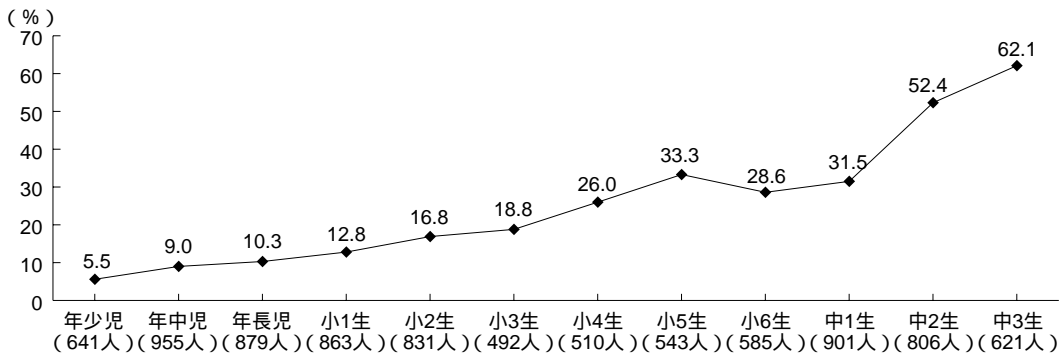


図3 - 14 月に2万円以上の教育費を使う割合×学年



## 中学受験

### 1. 学年別にみた中学受験の予定

子どもに中学受験をさせる予定があるか否かをたずねた。選択肢は「受験させる」「受験させない」「まだ決めていない」である。

#### ■ 小6生の17.8%が受験させる（図3-15）

母親に、子どもに中学受験をさせる予定の有無をたずねた結果が、図3-15である。小3生以上の合計をみると、16.0%が「受験させる」と答え、13.1%が「まだ決めていない」と答えている。学年別には、小3生の段階で「受験させる」と決めている母親は全体の13.6%、「まだ決めていない」母親が23.6%であった。学年が上がるにつれて、「まだ決めていない」母親が減り、小6生の母親では「まだ決めていない」は21.2ポイント減少して2.4%になる。その分増加するのが「受験させない」母親で、小3生の母親の61.4%から15.9ポイント増えて小6生の母親では77.3%になる。「受験させる」母親は学年とともにわずかず増加して小6生では17.8%になるにとどま

る。これらの変化の読み方としては、小3生の段階で「まだ決めていない」母親の多くが、次第に「受験させない」ことに決めていった結果であると考えるのが自然である。

#### ■ 東京都で多い中学受験（図3-16）

中学受験をする割合は、調査対象者の住んでいる都県によって異なっていた（図3-16）。最も中学受験させる母親の割合が多かったのは「東京23区内」37.9%、続いて大きく離れて「23区以外の東京都」21.8%、「神奈川県」20.8%の順であった。そして、さらに大きく離れて「千葉県」4.3%、「埼玉県」4.3%であった。「東京23区内」と「千葉県」「埼玉県」との差は、実に33.6ポイントになっている。このように「千葉県」「埼玉県」で中学受験をさせる母親が少ないのは、両県では東京都や神奈川県と比べて、公立高校からの大学進学実績が高くなっていることが影響しているといわれている。



図3 - 15 中学受験の予定×学年

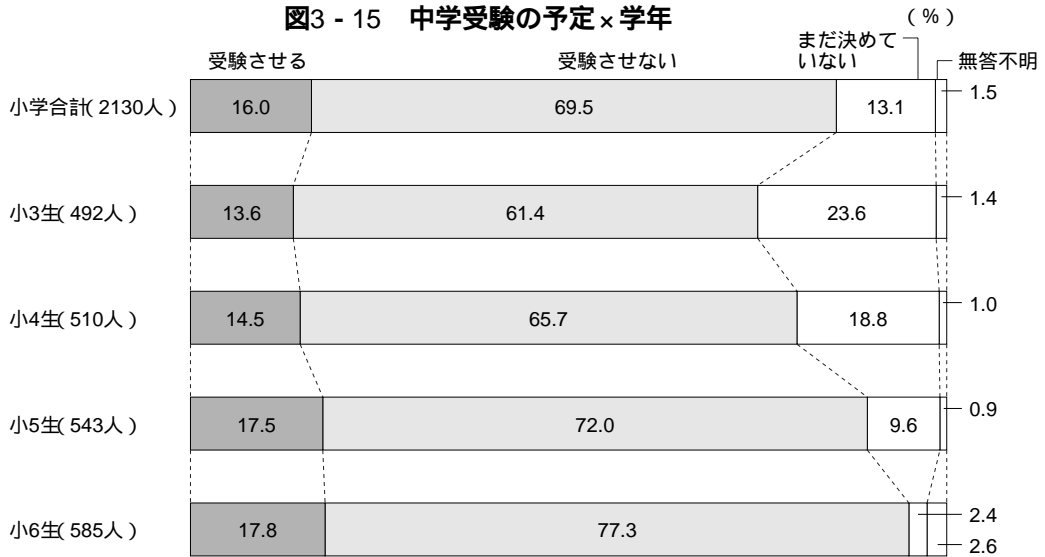
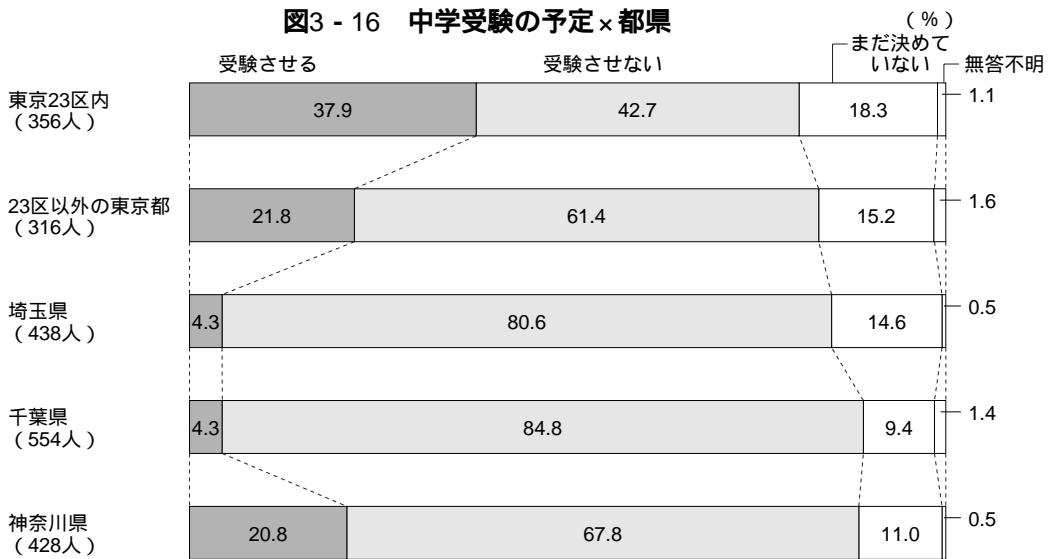


図3 - 16 中学受験の予定×都県



## 2. 中学受験に必要なこと

中学受験には、受験準備費用と中学に入ってから学費を払うだけの経済的な余裕が必要なことはいうまでもないが、その他にも、小学校の勉強程度を“超えた”入試問題が出るので、塾で入試対策の授業を受けること、そして、塾での勉強を支えるために父親や母親が塾の保護者会に参加したり教材を整理してあげたり実際に勉強をみてあげられること、が条件であるといわれている。

■ 専業主婦で中学受験指向が強いが、働いている母親も受験させる（図3-17）  
 中学受験をさせる母親には専業主婦が多いといわれている。受験勉強をするためには、母親に多くの支援が求められるからだといわれている。そこで、図3-17で、母親の就業状況と中学受験の予定の関連をみてみた。

図をみると、「受験させる」と決めている割合は、確かに「専業主婦」22.3%で、最も高くなっている。ただし、専業主婦以外の母親は子どもに受験させないかという、そうでもない。「パートタイマー」11.2%、「常勤者」10.7%と両タイプともに1割強が「受験させる」としている。中学受験は決して、専

業主婦の子どもだけのものではない。

■ 受験予定者は塾・教室と家庭教師が増加、その他の習い事は減少（図3-18）

最後に、中学受験予定者がどのような塾や習い事に通っているか、図3-18を用いて調べてみよう。この図では、塾や習い事をいくつかのカテゴリーにくくって示してある。

まず、プリント教材教室、進学塾、補習塾、家庭教師などの「塾・教室」についてみると、小5生の段階で中学受験を予定している母親の80.0%が塾や教室に通わせている。小6生ではやや下がり76.9%になる。

その他のカテゴリーはいずれも受験が近づくにつれて、減少していつている。しかし、バレエ、楽器、音楽教室、絵画教室などの「芸術系」は小3生の41.8%と比べて27.4%減ではあるが小6生になっても14.4%が継続しており、「習字・そろばん」も小3生と比べて18.7%減ではあるがそれでも6.7%が継続している。これに対して、スイミングスクール、体操教室、地域のスポーツチームなどの「スポーツ系」は小3生の49.3%から44.5ポイントも減少して4.8%と5.0%を切っている。

図3 - 17 中学受験の予定 × 母親の就業状況

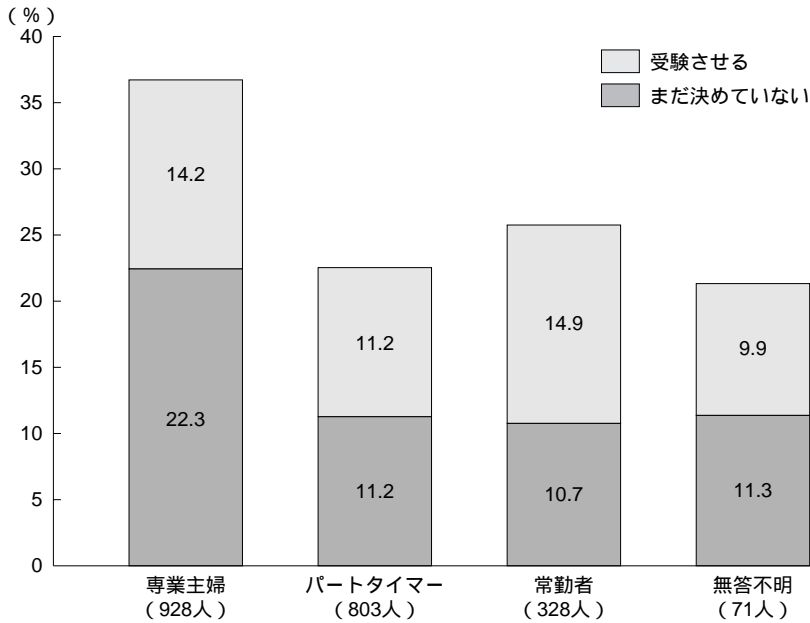


図3 - 18 中学受験の予定 × 現在通っている塾や習い事

